

生涯にわたって 社会のいたるところで学ぶための方法序説

「社会教育」の言葉・名称

安西 春樹

提案：社会教育の現場で使われる言葉や名称について、考えを巡らせてみてはいかがでしょうか。

中央区では、知的障害のある方の学びの場として、「中央区かえで学級」を開設しています。いわゆる「障害者青年学級」と言われる分野の事業で、特に東京23区では、60年ほど前から各自治体で開設されはじめ、現在まで各地で続いています。

中央区かえで学級も、当時の公立中学校特殊学級の生徒やその保護者、教員、行政が学校卒業後の学びの場の確保を求めて、1970年に「中央区かえで青年学級」としてスタートさせました。

当時の社会教育事業の中心として実践されていた「青年学級」の枠組みを使い、試行錯誤しながら運営され、1999年の青年学級振興法の廃止の後も、区の事業として引き継ぎ、「青年」

の名称はなくなりましたが、今まで学級が運営されています。

名称の変更

中央区かえで学級では、近隣区と合同でレクリエーション大会を年に1回、持ち回りの当番区が主催して開催しています。

先日、その四区の会合で、名称変更の提案があり、今までの「四区青年学級連合レクリエーション大会」の名称は、今年度から「四区レクリエーション大会」となりました。

改称の理由としては、各区の学級生（受講生）の年齢層が「青年」と言うにはかけ離れているという点、また、一部を除き、すでに事業名（学級名）に「青年」を冠していないという理由で数年前から見直しの協議をしていたものです。

四区に限らず、各自治体の事業名は、学級であったり教室であったり、クラブであったり様々ですが、「青年学級」といえば通

じる、いわば社会教育の共通言語がまた一つ薄れていく現場に遭遇した思いでした。

もちろん、時代に即したという意味では正解なのかもしれませんが、開設当時の想いは各学級に綿々と引き継がれ、多様化しつつも各地で続いていることは喜ばしいことではありますが、社会教育に関わる者としては寂しさを覚えたところです。

この大会は、中央区が1971年に近隣区の障害者青年学級に呼び掛け、墨田区、江東区と三区合同開催で始まりました。1980年から千代田区の学級も参加し、「四区青年学級連合レクリエーション大会」として毎年開催が続いており、コロナ禍で2年ほど休止の期間がありましたが、今年度は千代田区の当番で第53回の大会を実施する予定です。

各区の現在の学級の名称はそれぞれ「千代田区日曜青年教室」「墨田区千代田区」「すみだ教室」（墨

田区)、「エンジョイクラブ」(江東区)、「中央区かえて学級」(中央区)となっています。

「青年学級」といえば？

東京23区部の知的障害者青年学級の成り立ちは、1964年の「すみだ教室」の開設に続いて、各地域で「青年学級振興法」の仕組みの中で開設されていった経緯があります。

開設時はそれぞれに「青年」の名称が入っていましたが、1999年の青年学級振興法の廃止に伴い、徐々に「青年」の名称が取られていきました。「中央区かえて青年学級」も、青年学級振興法の廃止に伴い「中央区かえて学級」と名称を改めています。

青年学級は、もともと勤労青年の学びの場として、1953年(昭和28年)に制定された青年学級振興法に基づき各自治体で開設され、高度経済成長期に若年労働力の教育機会を確保す

るために重要な役割を果たしました。

その目的としては、実際生活に必要な職業や家事に関する知識・技能の習得、一般教養の向上であったとされます。

また学級の運営方法として勤労青年の自主性を尊重し、その生活や地域の実情に合わせた運営をすることと定められ、学習主体の自主的な運営と学びが各所で盛んに行われていたようです。

法の廃止とともに各地の青年学級は、形を変え行政の事業として継続するもの、地域の自主サークルとして残るもの、さまざまな社会教育活動として変遷していきます。

中央区でも、数ある青年学級は、「青年学級」の名称こそ失われましたが、形を変え大部分を引き継いでいます。中には魚市場で働く方の「魚市場青年学級」など地域の特色を持ったものもあり、その後いくつかの事業と

合わさり区の生涯学習事業として続いていきます。中央区かえて学級もその一つです。

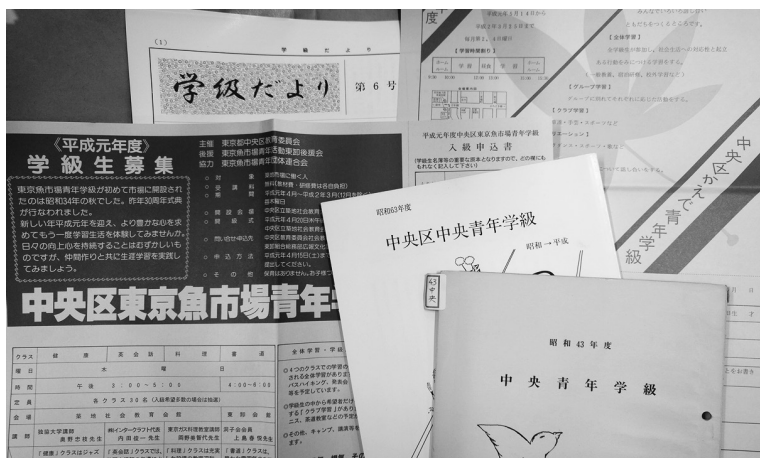
私が職業として社会教育に関わることとなった約25年前には、「青年学級」といえば、「知的障害者青年学級」のことを指す言葉とすでに変わっていました。

なくなりつつある「社会教育」の言葉

「青年学級」もそうですが、なくなりつつある言葉が周りに多く存在します。「社会教育」を少しかじっただけの私でも、社会教育の現場で聞かなくなってきた言葉があることを日々感じています。みなさんはいかがでしょう。

例えば、「公民館」という名称の施設)も東京23区では中央区のようにそもそも設置されなかった自治体もありますが、区部では最後となった練馬公民館の名称も、2012年に生涯学習センターとなり、特に東京23区では「公民館」と聞いて、どのような施設なのかをイメージすることができない方も多いのではないのでしょうか。

その他、青年の家、婦人学級、洋上セミナーなど、耳にすることが少なくなっ



た「社会教育」の言葉・名称も多く浮かびます。

「社会教育」はなくならない？

では、本誌のタイトルでもある「社会教育」はいかがでしょうか。

そもそも社会教育の言葉が出てきたのはほんの140年ほど前、明治10年代のことだとされますが、現在、社会教育の現場で区民と接していても、どちらかというの後発の「生涯学習」

の方が一般的に定着し、通じるように感じています。もしかしたら、「社会教育」の言葉は、戦前・戦時中に付いてしまったマインスイメージやその古くささを感じ、比較的新しい「生涯学習」の響きが心地よいのが理由の一つかもしれません。

ちょうど1980年代から続く「生涯学習体系への移行」の舵取りとともに生涯学習政策が進められる中、社会教育の包括的な理念としての「生涯学習」

の言葉が多く使われるようになり、「社会教育」の言葉が薄れていったことも確かです。

実際、私ごとになりますが、自分の肩書の中でも「社会教育」の文字が無くなっています。当初は社会教育指導員という肩書で、教育委員会事務局の社会教育課で社会教育に関わることになりましたが、今は首長部局の文化・生涯学習課の生涯学習係で生涯学習指導員となっています。

大学で社会教育主事任用資格を得ましたが、社会教育主事の発令は受けておらず、社会教育士でもありませんので、現在はいない状況です。

私が社会教育行政にかかわる間、文部科学省のセクションから組織改正により「社会教育」の名称が無くなっていく時期でもありました。

ちょうど「社会教育」の文字が無くなりつつある過程の中で、

もしかしたら、本誌「社会教育」も、別の言葉に変わる可能性があるかもしれないと感じたほどです。

一方で、2020年に「社会教育士」制度が誕生し、その称号の普及と「社会教育」の言葉の広がり期待されるようになりました。個人的にも「社会教育」の文言が残ったことはうれしい限りで、これを機に「社会教育」が言葉としても、理念としても受け継がれていくことを期待しています。

言葉が変わっても

前述した青年学級も、名称は変わっても、青年学級振興法のもとで培われた理念は今でも運営の方法として引き継がれています。

言葉は生き物。良くも悪くも変わっていくものです。徒に淘汰されていく言葉を悲嘆するのではなく、言葉に託された想いを振り返りつつ今に必要な言葉

を創り育てる、伝え残すことが大切なのでしょう。

新しい言葉の持つカセット効果に惑わされることなく、また、使い続けられている言葉のマイナスイメージに縛られることなく、言葉に込められた想いや背景、歴史を受け止めながら、時代に合ったプラスの価値を言葉に乗せて次世代に受け継いでいきたいとも考えます。それが次世代に向けての何よりの宝となることでしょう。

皆さんも、社会教育の現場で使われる言葉について、振り返ってみてはいかがでしょう。

次号の「発想する！授業」は尚絅学院大学の松田さんよりお届けする予定です。お楽しみに。

安西春樹（あんざい・はるき）

中央区区民部文化・生涯学習課
総括生涯学習指導員